

放課後等デイサービスの支援員に求められる 支援実践能力の予備的検討

Preliminary investigation about skills requiring for staff of after-school day service

○小幡知史, 小幡明香

Obata Satoshi, Obata Sayaka

(NPO 法人だいち 放課後等デイサービス事業所樹の子クラブ・茨城キリスト教大学)

(NPO Daichi After-school day service Kinoko Club・Ibaraki Christian University)

Key words:放課後等デイサービス, 支援員, 支援実践能力

目的

全国の放課後等デイサービス事業所に対する実態調査では、回答者の半数近くが、「十分な知識・技能・経験をもった職員が少ない」ことを指摘している。そこで本研究では、神経発達障がい児を対象とした放課後等デイサービス（以下、放デイと略称）の支援員に焦点をあて、支援員に求められる支援実践能力について明らかにすることを目的とする。

方法

調査対象は、放デイでの勤務経験年数が2年以上の支援員だった。調査内容は、放デイに従事する支援員に求められる能力であり、データ収集方法は、半構成的面接法だった。データの分析には、質的帰納的分析を用いた。倫理的配慮は、研究参加者に、研究の趣旨、参加・不参加の自由、途中中断が可能なこと、得られたデータは個人が特定されない方法で分析することなどの個人情報保護について事前に説明し、同意を得た。

結果・考察

3名から聞き取り調査を行い、調査に要した時間は30分から1時間であった。得られたデータから目的に沿うものを抽出し、意味の類似性に伴い分類・抽象化した結果、75コード、8カテゴリーが抽出された。

カテゴリー毎に見ると、「適切な環境と規律の中で子どもの行動を見守る」では、物品配置などを含め、子どもが過ごす環境を整えることで、自然と好ましい行動が起きることなどが示された。子どもの行動を強制によるものではなく、自然に引き出そうとする関わりが重要であると考えられる。「適切な観察および記録に基づき、科学的根拠のある関わりを行う」では、支援員の思い込みや先入観にとらわれず、エビデンスベースで関わるということが述べられた。これは、対人援助職全てに共通することであると考えられる。「対象となる子ども一人ひとりの個別性を考慮し、画一的な対応はしない」では、対象となる子どもの生活歴を重視し、子どもひとりひとりに合

う活動を組み立てることが示された。障害の種類や重症度だけではなく、子どもの生活を基盤として関わることの重要性が示唆された。「支援員としての役割を自覚し、質の高い支援を提供する」では、教員ではなく支援員としての役割・立場を踏まえること、内省的に関わりを評価すること、児童虐待防止の取り組みなども語られた。特別支援学校などの教員と支援員の役割の違いについても詳しく検討する必要があると考えられる。「障害や子どもの特性、特別支援に関する基本的な知識を身につける」では、障害の種類や特徴、子どもの特性、また法制度に至るまで、広い知識が求められることが示された。しかし、公的な資格を要しない支援員に深い知識を求めることの難しさもあり、どこまでを必須とするかの判断は個々の支援員に委ねられると考えられる。「子どもに関わる職業人としての自覚を持ち、子どもとともに楽しむ」では、子どもと自分自身を守るための身だしなみや、社会人としてのマナー、またユーモアの大切などが語られた。このことから知識や技術だけでなく、支援員としての人間性も考慮されるべきであると考えられる。「保護者と共通の目標をもち、チームとして子どもと関わる」、「子どもだけではなく、家族も支援の対象として捉える」では、子どもも含め家族を支えることや、保護者と協働関係を築く必要性も述べられた。保護者とは、子どものためのひとつのチームであるという関係性を築きながら、同時に支援の対象として捉えるという2つの性質を持つ関わりが必要であることが示唆された。

今回の調査では、3名から得られたデータであり、データに偏りがあることが予想される。今後も、調査を継続し理論的飽和を目指すとともに、支援員に必要な能力の概念構成を明らかにし、実践能力の自己評価ができるような項目の作成を目指す。

参考文献

1) 障害のある子どもの放課後保障全国連絡会 (2014). 放課後デイ実態調査. http://www.nginet.or.jp/jdprp/data/24_2houkago2014.pdf, 2016.9.12.